

プロレタリア活動家・李北満の生涯と著作 — 人物像と 1945 年までの活動を中心に —

池 山 一 男

I. はじめに

1. 本稿の目的

李北満は日本と朝鮮半島で、プロレタリア芸術および反植民地運動を中心とした社会活動家である。中野重治の「雨の降る品川駅」¹の中で「李よ さやうなら」として登場する人物としても知られている。植民地期は主として朝鮮の文芸運動や労働・教育等の実態を告発し、帝国主義からの解放や民族独立等を主張しながら、朝鮮共産党再建運動にも参加した。日本の敗戦による植民地からの解放後は実業家の傍ら、朝鮮半島の独立および民族統一国家樹立のための活動をした。生涯を通じて著した作品は、機関誌・新聞等への寄稿を中心として 70 以上を数える。しかしながら人物像については曖昧な部分が多く、朝鮮総督府の記録、交流があった人物による著作、または新聞記事等に時折登場する程度で、不明な点が多い。

筆者は、これまであまり注目されなかった李北満の生涯・思想・作品群について、日本と朝鮮でのプロレタリア芸術活動・民族運動・社会主義活動を軸に検討をしている。朝鮮人の視点による左翼的芸術運動および植民地教育等の論考を検証することで、植民地期の在日朝鮮人による社会運動や植民地支配の実態をより鮮明に理解することができ、在日朝鮮人が日本の帝国主義や植民地支配をどのように見ていたのかを知ることができるからである。

ここでは基本的な情報として、人物像と解放前の動向を時系列でまとめ、著作の傾向を知る。作品を時代背景や活動状況等との関連から検討することは、人間像を理解する上では重要であるものの、本稿では作品の列挙と簡単な傾向を記すにとどめ、具体的には別稿で考察する。これまでの情報の曖昧な部分を排除して人物像を確定させ、その業績を明らかにすることは、今後の研究者にとっても有益な方向性を提示できるものとなろう。

2. 先行研究

李北満について包括的かつ時系列的に紹介している文献はほとんどない。経歴は検挙時の記録を参照したと思われる『韓国社会主義運動人名事典』や日韓の人名辞典等にある²ものの、情報の不一致が見られる。

高川まゆみ³・申銀珠⁴・高榮蘭⁵らは、親交があった中野重治や金斗鎔との関連から考察し、パク・ジェホンは李北満の代表作である「帝国主義治下朝鮮の教育状態」の概略を紹介している⁶。沈熙燦⁷は李北満をマルクス主義を会得した「職業革命家」とし、方向転換期の活動や経済史研究について分析している。おそらく李北満の経歴や行動に関する唯一の研究である。本稿では、それらの研究に見られる基本情報のゆらぎを解消し、現時点で可能な範囲において、李北満の経歴を共通の認識として確定したい。

3. 活動時期の区分

李北満の経歴について、活動の様相と作品の傾向によって4つの時期に区分して考察してみたい。

まず生育期は、出生から1926年までの左翼的な芸術活動以前で、マルクス主義にはほとんど触れていなかった時期である。漠然と植民地朝鮮の状況に違和感を抱いていたのではないだろうか。続いては展開期で、主に日本で活動した1927年から1931年にかけての、マルクス主義や方向転換論によりプロレタリア芸術と朝鮮の実態について著述した時期である。反帝国主義や民族意識を主張し、各機関誌に投稿した。また後々まで交流し、影響を受けた人物に出会った時期でもある。さらに実践期は、1931年から1945年にかけての朝鮮共産党再建に参加し、逮捕・拘留も経験した時期である。この時期はマルクス主義に基づく社会科学的な手法によって、経済史家としての才能を開花させた時期でもある。最後に戦後期で、主に日本で朝鮮半島の統一組織に参加した時期であるものの、これについては別稿で論じたい。

II. 李北満について

李北満の基本的な情報については『思想彙報』⁸・『朝鮮新聞』⁹・『統一と平和』¹⁰などにある。

まず本名は李福萬¹¹、代表的な筆名が李北満¹²である。筆名として柳春樹¹³・林田朝人¹⁴・李炳宇¹⁵なども使用した。開放後は福田満として会社を経営した¹⁶。

生年については、1906年・1907年・1908年の三説がある。1906年生としている資料は『近代日本社会運動史人物大事典』¹⁷等で、申銀珠¹⁸らは1907年生と

している。

1908年生とする文献は『思想彙報』が「明治四十一年〔1908年：池山〕七月十六日生」と具体的に記しており¹⁹、『韓国社会主義運動人名辞典』もこれを踏襲している。さらに藤田俊次〔1905年生：池山〕が「私より3つ若い」²⁰と記していることから、1908年生とするのが最も合理的かつ蓋然性が高いと考える。

生まれは「朝鮮忠清南道天安郡笠場面下場里四十五番地」の「貧農ノ家」である²¹。家族は父「李元植」²²、母「李均植」で、弟「李寿萬」²³と妹「李貴礼」（林和の妻）がいた²⁴。また1938年に結婚して長男真一を、1948年に梅子と再婚して次男英俊がいた。

死亡については『朝鮮新聞』や『統一と平和』から、1959年2月23日と判る。死因は脳出血で享年52歳であった。

Ⅲ. 1926年までの動向と著作

まずは生育期を辿る。10代後半の若者を日本へと向かわせた理由は李北満を語る上で重要であり、今後詳細な調査が必要である。

1. 1926年までの動向

李北満は、普通学校卒業後に東亜煙草株式会社、京城日報社で給仕として勤め、公立商業学校を卒業した²⁵。その頃は、友人の朝野温知が「夜学の仲間で京城日報という新聞社の給仕をしていた」²⁶と書き、また弟と思われる李寿萬の絵²⁷に「水下洞公普三年生」とあることから、家族と京城の水下洞付近で生活し、夜学の水下洞公立商業補習学校に通学していたのであろう。

初来日については「予審終結書」に「大正15年〔1926年：池山〕3月ニ勉強ノ目的ヲ以テ内地ニ渡来シ第一海上火災保険株式会社、東京朝日新聞社等ノ雇員トナリ」とある一方で、前記の朝野温知は、李北満と日本に渡ったのは1924年初夏の頃²⁸としている。また1924年に報知新聞に入社した松本健二は、同時期に朝日新聞社の李北満に会い「朝鮮解放運動の戦士」から影響を受けたと書いている²⁹。筆者は、朝野らの記述から1924年来日としたい。

なお李北満は早稲田大学に在籍したと『統一と平和』・林浩治³⁰・金三奎³¹等が記しているものの詳細は不明である。

2. 1926年までの作品

京城日報社に勤務していた頃の作品で、少年小説と称する創作読み物（No.5, 8, 10）、あるいは少年の悩みや心情を手紙の形式で発露した作品がある。No.2には「無

学無産者」・「朝鮮の文学」という語がある。その後の活動の方向性を暗示し、階級意識や芸文活動への関心の萌芽とも考えられる作品である。

[1] 1924年³²

No	作品名	筆者名	掲載雑誌・新聞
1	初春	李福萬	『毎日申報』3月30日
2	田舎にいる李兄さんへ	恵春 李福萬	同上4月27日
3	成功するまで(一)～(七)	恵春 李福萬	同上5月4日～6月29日
4	東京の李兄さんへ	李福萬	同上7月20日
5	金剛石の襟巻き	恵春 李福萬	同上8月10日
6	世上は冷たい	李福萬	同上8月31日

[2] 1925年

7	不良者	恵春	『毎日申報』1月18日
8	勇士ピョールプ	李恵春	同上1月25日～3月8日
9	雪は後に	□福萬	同上2月1日
10	静子	恵春	同上8月16・23日
11	その日その日集まる人たち	李福萬	同上12月13日
12	壮士マルボク	恵春	同上12月13日

1926年の作品は、未見。

IV. 1931年までの行動と著作—プロレタリア芸術活動

1. 1927年頃の情勢（方向転換期）

1922年に日本共産党が非合法に結成された。1924年に一旦解党した後、1926年に福本和夫の「方向転換論」—いわゆる福本イズム³³—を軸として再結成された。それまでの山川均の方向転換論を折衷主義・日和見主義であるとして批判した上で、マルクス主義に立脚した純粋な革命的中心を創造し、さらには理論闘争の展開後に政治闘争へと移行すべきと主張して、左翼運動の中心的思想となった。

朝鮮では1925年になって朝鮮共産党が結成された。弾圧と再結成を繰り返す中、コミンテルンから承認を取り消され、1928年にはほぼ壊滅した。東京でも1926年に朝鮮共産党日本部と高麗共産青年会日本部を組織したものの、繰り返しの弾圧により再建運動は地下に潜行した。

そのような流れを受け、朝鮮では1925年頃から左翼的な思想を帯びた芸術団体が登場し、主として日本への留学生が持ち帰った共産主義や方向転換論の影響から、芸術活動にも階級闘争を取り入れ始めた。1926年には朝鮮プロレタリア

芸術同盟（以下 KAPF）³⁴ が、無産階級文化の樹立を目指すこと決定し³⁵、さらに新幹会の成立後にはこれらの活動は朝鮮においての一大潮流となった。

李北満は日本で、KAPF 東京支部の結成に参画していた金斗鎔と知り合い、東大新人会に出入りしながら³⁶ 金三奎・中野重治らとの出会いによって、社会主義的思想を学びつつ植民地朝鮮の不条理さや民族運動に目覚めたのであろう。1927 年に入って、突如活動の表舞台に登場した。展開期は、20 代前半の李北満にとって、その後の活動の原点ともいえるべき重要な時期である。

2. 第三戦線社

1927 年 3 月、洪陽明・高景欽らがプロレタリア芸術の研究と普及を目指して東京で「第三戦線社」を設立し³⁷、李北満も参加した。第三戦線社は 1927 年夏に朝鮮各地で「夏期巡回講演会」を開催し、李北満も「日本文壇の鳥瞰」という題の演者として紹介されている³⁸。7 月 18 日に開催された咸興講演は大盛況で、李北満は「講演の展開につれてその熱狂は獐猛に高潮した」³⁹と記している。この第三戦線社に関わった者たちは、朝鮮での方向転換論やプロレタリア芸術の方向性に大きな影響を与えたものの、日本の福本イズムや目的意識論⁴⁰に影響されただけの、朝鮮の実態に合致しない空虚な気分を過ぎず、李北満自身も「日本の同志たちの理論を無反省・無批判に直輸入」⁴¹したと自己批判しているように、朝鮮では本格的な議論にまで達することはなかった。

3. 朝鮮プロレタリア芸術同盟および同東京支部

朝鮮に持ち込まれた福本の方向転換論は、文芸活動にも波及した。1927 年 10 月 KAPF は「経済闘争から政治闘争へ」という方向転換と、第三戦線社の発展的解消による KAPF 東京支部の設置を決議した。一連の動きには、民族統一戦線としての新幹会の存在を無視できない。東京支部は創立大会を開催して、新幹会支持・朝鮮総督××政治反対などを決議し、李北満は出版部委員として機関誌『芸術運動』を発行した。創刊号には金斗鎔・中野重治・林和らが寄稿し、プロレタリア芸術運動論を展開した。

東京支部は、KAPF と日本プロレタリア芸術連盟との連帯構築に大きな役割を果たした。金斗鎔・李北満・中野重治らは互いの機関誌で、日朝の読者に各々の実情と思想を伝えた。ただし日本では、朝鮮にさほどの関心を示してはおらず、連携が拡大することはなかった。

一方コミンテルンは、山川を前衛党の結成を否定する日和見主義とし、また福本理論は党と労働者を分離し、レーニン主義とは決定的に異なるなどと批判した「27 年テーゼ」⁴²を発表し、その後方向転換論は急速に排除された。

1928年に李北満は、昭和天皇の即位大典の対策として国外退去を命じられた。この時の理不尽かつ無念な感情を「追放」に書いている。この時の情景を中野重治が「雨の降る品川駅」として発表した。満田郁夫は、出国の旅に出たのは6月26日と推定している⁴³。

4. 1927年～28年の作品

この時期は、在日朝鮮人たちと新組織の設立と活動がありながらも、日朝の機関誌を中心に方向転換論・唯物論を駆使して評論活動を展開した。No.21では方向転換論を主張するとともに、芸術運動も無産階級運動の一環であるとして、KAPFは新幹会の指導を受けよと主張した。発表後韓雪野から「一種の左翼小児病である」⁴⁴等の厳しい批判を受けた。李北満はで反論を試みるも感情的な反駁が多く論理性に乏しい内容に終始し、やがてこの論争は「27年テーゼ」と共に終了した。その後李北満の論調も、テーゼや階級闘争を意識した作品へと変化した。

この時期は、マルクス主義と福本イズムにより昂揚した芸術運動論が中心で、マルクス主義や唯物弁証法への純粹な心酔が感じられる。帝国主義批判や民族解放などの主張は、それほど前面には出ていない。

[3] 1927年

13	給費生	『第三戦線』5月創刊号
14	囁言者の潜越 - 宗順鎰君を笑う -	『中外日報』8月11～13日
15	朝鮮からのたより	『プロレタリア芸術』8月号
16	プロレ劇場 暴圧に対して	『中外日報』8月31日
17	最近日本 文壇鳥瞰 (一)～(八)	『朝鮮日報』9月8～17日
18	朝鮮の芸術運動	『プロレタリア芸術』9月号
19	タンクの出発 (訳) [林和 作]	同上10月号
20	朝鮮とその守護神	同上10月号
21	芸術運動の方向転換論ははたして真正な方向転換論であったのか?	『芸術運動』11月号
22	朝鮮労働慰安会の記	『プロレタリア芸術』12月号
23	当然に揚棄される所謂「目的意識性」	『朝鮮日報』12月11～16日

[4] 1928年

24	日本芸術運動に対する断片的検討	『芸術運動』 1・2月号
25	山梨総督を迎ええるに際して	『プロレタリア芸術』 2月号
26	我々の演劇の暴圧	『前衛』 3月号
27	朝鮮に於ける無産階級芸術運動の過去と現在	『プロレタリア芸術』 4月号
28	小ブルジョア乱舞に対して	『中外日報』 4月30日～5月3日
29	朝鮮に於ける無産階級芸術運動の過去と現在(二)	『戦旗』 5月号
30	メーデーを迎えるに際して	同上5月号
31	追放	同上9月号
32	似而非弁証論の排撃一特に自称弁証論者韓雪野氏へー	『朝鮮之光』 7月号
33	文壇諸家の見解(8)	『中外日報』 7月2日
34	苦力(訳) [金英根 作]	『戦旗』 11月号

5. 無産者社

朝鮮のKAPFと東京支部との間の対立から⁴⁵、金斗鎔・金三奎・林和・安漠・李北満らが1929年5月に「無産者社」を設立⁴⁶し、『無産者』創刊号を1929年5月に発行した⁴⁷。創刊号には金斗鎔・李北満らの論文等と共に、中野重治「雨の降る品川駅」⁴⁸の朝鮮語訳が掲載されている。

一方で、朝鮮共産党再建運動に関わっていた高景欽と無産者社の金三奎・金致廷・李北満らが協議した結果、無産者社を共産党再建運動の拠点とする変更を決定した。無産者社は朝鮮共産党再建のための非合法組織となり、共産主義を主張するパンフレットを次々に発行して朝鮮にも送った。1931年にこの活動が発覚し、幹部の検挙により消滅した。

6. その他の組織活動

李北満は無産者社の活動とほぼ並行して、各種の団体に所属した。まず、1929年7月に「反帝国主義民族独立支持同盟日本支部」⁴⁹に参加した。井上学は「反帝リーフレット」中に李北満の作品があるとしている⁵⁰。同年11月末には、金斗鎔らが結成した「在日本朝鮮労働総同盟」が「日本労働組合全国協議会」への合流を協議した過程で、全国代表者会議準備委員に選出されている⁵¹。同じ頃、楨本楠郎の童謡集の出版に際して、林和らと共に尽力した⁵²。これには中野重治も関わっていた⁵³。

1930年4～5月には「プロレタリア科学研究会」主催の講演会で「植民地運動と支那問題」と題して講師を務めた⁵⁴。同年9月にはプロレタリア教育を研究する「新興教育研究所」の植民地研究会に所属して⁵⁵、1931年7月に「帝国主義治下に於ける朝鮮の教育状態」を発表した。なお研究所との関わりはこの時だけである。

その後11月には、金斗鎔らと東京でマルクス主義を研究する「同志社」を結成した。しかしコミンテルンの「一国一党の原則」を理由に、僅か2カ月で解散した。

この時期は多方面に亘って精力的に活動したようであるものの、活動の詳細については多くがはっきりしない。

7. 1929年～31年の作品

この時期は組織における活動が多忙であったようで、作品はそれほど多くない。No.43は朝鮮人から見た植民地教育政策の欺瞞と欠陥をデータを基に分析し、奴隷教育からの解放と完全なる独立を述べた代表作の一つである。

一方ではそれまでの芸術運動に関する論評から、朝鮮共産党再建活動との関わりの中で、政治的な色彩を帯びた内容や民族問題を意識した作品が増えた時期でもある。

[5] 1929年

35	朝鮮のプロレタリア運動とプロレタリア文化	『国際文化』4～6月号
36	元山××的労働者の蹶起	『無産者』5月号
37	六月十日を迎えて	同上7月号
38	無題（コラム「導火線」の一部）	同上7月号
39	所謂『プロ文士』に送る絶縁状	同上7月号
40	国恥記念日をストライキとデモで戦え！	『反帝リーフレット』第1輯
41	日韓併合の経緯	『朝鮮問題叢書』（広告のみ）

[6] 1930年

42	所謂「朝鮮自治権拡張案」の本質	『我観』5月躍進号
----	-----------------	-----------

[7] 1931年

43	帝国主義治下に於ける朝鮮の教育状態	新興教育パンフレット1
----	-------------------	-------------

V. 1932年～45年までの行動と著作—朝鮮共産党再建

実践期は、無産者社での活動前後にいくつかの団体で活動を経て、実際に朝鮮共産党再建運動に関わった時期である。取締が厳しくなった当局からも次第に注目され、繰り返し検挙された20代後半の時期である。

1. 李北満事件・朝鮮共産党再建事件

1931年1月25日『朝鮮日報』は「少し前に東京から戻った李北満（無産者社

編輯兼発行人)と実弟の李寿萬を引致」⁵⁶と報じている。無産者社の朝鮮共産党再建運動パンフレットを朝鮮に持ち込んだ容疑で初拘束され、「李北満事件」とも報じられた⁵⁷。なお5月には金三奎と会っていることから、しばらくして釈放されたものと思われる⁵⁸。この事件はその後、高景欽・金三奎・黄鶴老らを多数検挙した朝鮮共産党再建事件へと発展した。

2. 労働階級社事件

上の事件で検挙を逃れた金致廷・金斗楨らは、1932年1月に朝鮮の労農大衆のために「労働階級社」を結成し、李北満は書記部責任者として加入した⁵⁹。労働階級社は日本共産党民族部の下部組織という位置付けで、日本共産党と協力して朝鮮共産党再建を目指した。

その後日本共産党中央民族部および金斗鎔らから一国一党の原則に反する等の見解があり、結成から数か月で解体した。一方朝鮮共産党再建を察知した警視庁および朝鮮総督府は関係者を順次検挙した。李北満は1933年の「治安維持法違反朝鮮人起訴者調」に、以下ように記録されている⁶⁰。

被告人氏名	別名	検挙年月日	起訴年月日	犯罪事実	団体関係	学歴	職業	年齢
李福萬		昭和7.12.2	昭和8.3.4	朝鮮共産党再建のための労働階級社書記局責任者	労働階級社	商業学校卒	無職	26

その後1935年9月に病気を理由に保釈され、10月に東京刑事地方裁判所が予審終結決定とし⁶¹、1936年4月に懲役2年執行猶予3年の判決を受けた⁶²。

3. 朝鮮新聞事件から解放まで

朝鮮共産党日本総局・高麗共産青年会日本部の活動をしていた李雲洙・朴台乙らは、金天海(鶴儀)らを加えて、1935年12月に「朝鮮新聞社」を設立し、『朝鮮新聞』⁶³の発行を決定した。李北満は1936年前半に金斗鎔らとともに参加し、数作品の評論を掲載した⁶⁴。

『朝鮮新聞』は「民族意識ノ昂揚ニ努ムル…」として17名が7月31日に検挙され⁶⁵、翌1937年6月に起訴された。李北満は10月に起訴猶予処分⁶⁶となった。

朝鮮共産党再建運動に身を投じた李北満は、無産者社時代の高景欽(転向)、労働階級社時代の金致廷(病死)などを失った後に、新しい活動の場を求めて朝鮮新聞社に参加したのであろう。ただし金天海・李雲洙・朴台乙らのように、自らが組織の先頭に立ち戦闘的に活動する様子は、これまでと同様に見られなかった。

なお朝鮮新聞社事件の後は、結婚後中国に渡った。天津や青島で貿易事業をしていたようである⁶⁷。

4. 1932年～45年までの著作

この時期で特筆すべきは『歴史科学』誌上にアジア的生産様式を土台とした朝鮮の経済史を扱う論文を掲載していることである。服部之総⁶⁸ら講座派の『日本資本主義発達史講座』を参照し、朝鮮の土地所有や経済史を論じた質の高い作品である。姜晋哲は「史的唯物論の発展理論を韓国史に適用したのはこれが初めて」との評価をし⁶⁹、須山計一は「彼の本領は歴史学者であった」⁷⁰と言わしめた作品群である。同時期には「李北満執筆になる……ソ連、中国共産党を謳歌賛美せる論説」⁷¹もある（未見）。共産党について直接的に論じたのはこの時期だけである。なお1937年以後は、著作が確認できない。

[8] 1932年

44	吾々はどうすれば飢餓を免がれるか [柳春樹筆]	『労働階級』創刊準備号
45	朝鮮に於ける土地所有の変遷	『歴史科学』8月号

[9] 1933年

46	日清戦争論	『歴史科学』6月号
----	-------	-----------

[10] 1936年

47	表裏不同なる越境問題の真相	『朝鮮新聞』（号数不明）
48	外蒙問題に対するスターリン氏の見解云々	同上（号数不明）
49	常勝中国共産軍山東省大半占領云々	同上（号数不明）
50	仏蘭西選挙人民戦線大勝利	同上（号数不明）
51	壇君神話研究（訳）[金臺俊著]	『歴史科学』2～4月号
52	李朝末葉の経済状態に関する若干の考察	同上12月号

VI. おわりに

李北満の生涯は断片的な情報が多く、実像を把握しにくい人物である。本稿では簡略ながら、多少なりとも明らかにできたと考える。

来日後に出会った人物からマルクス主義を吸収し、プロレタリア意識や共産主義の思想を会得した。幼少期から植民地差別の不条理や無力感を感じていた李北満にとっては、朝鮮では知る術もなかった思想に衝撃を受け、憧憬を感じたに違いない。

まずは当時の共産主義者に主流であった方向転換論と目的意識論に触れた。日本と朝鮮においてプロレタリア芸術論を展開し、これがその後の活動の基本と

なった。方向転換論の消滅および無産者社の頃からは、芸術論からの脱却を見せ始めた。芸術活動に限界を感じたのか、次第により直接的な共産党再建運動へと進んでいき、数回の検挙を経験しつつも成就しなかった。なお解放後は、1945年末に朝鮮半島に戻って新聞社等で活動した後に、1947年に再来日した。左翼団体での活動からは離れ、事業を進めると共に独自の南北統一運動を実践した。

10代から身につけた共産主義思想やマルクス主義思想は、その後一貫して李北満の思考の中心にあった。芸術論争時の感情的で強引な論調から、日本の暴圧や植民地支配の不合理を論じるにつれて次第に数値情報を分析した社会科学的な手法で、教育や経済史などについての考究を重ねた。朝鮮では言論や思想を厳しく制限され、また日本では朝鮮への理解が乏しい上に、朝鮮人であることによる差別を感じていたであろう。そのような中、朝鮮人の視点から記された作品には大きな意義がある。今後は研究者としても正当な評価を得るべきであろう。

李北満は高等教育を受けてはいないにもかかわらず、社会主義思想と共に高い日本語運用能力を示している。この能力をどのように習得したのか、また植民地解放や民族独立という意識をいつ抱いたのかについては、李北満を知る上では重要な要素で、今後検討すべき課題である。

李北満は、在日朝鮮人の活動において重要な人物であるにもかかわらず、これまで注目されてきたとは言いがたい。今後その実態をより明らかにし、在日朝鮮人の共産主義活動および日本での統一運動とその失敗を検討する上でも、これまで以上の李北満像を得ることが重要となってくるであろう。

注

- 1 中野重治「雨の降る品川駅」『改造』2月号（改造社、1929）、82-83.
- 2 岩波書店事典編集部『岩波 世界人名大辞典 第1分冊』（岩波書店、2013）、223、近代日本社会運動史人物大事典編集委員会編『近代日本社会運動史人物大事典4』（日外アソシエーツ、1997）、930、『韓国民族文化大百科事典』（web版）等がある。
- 3 高川まゆみ「中野重治論」『藤女子大学国文学雑誌』第54号（1984）、78-97.
- 4 申銀珠「<朝鮮>から見た中野重治 植民地知識人の自画像を求めて」『第17回国際日本文学研究集会研究発表』（1993）、121-144.
- 5 高榮蘭「戦略としての『朝鮮』表象」『日本近代文学』第75集（2006）、119-134.
- 6 パク・ジェホン「日帝の朝鮮人差別教育政策批判 - 李北満の帝国主義治下朝鮮の教育状態を中心に」『日本語文学』第41巻（2009）、331-350.
- 7 沈熙燦「帝国日本のマルクス主義と植民地朝鮮—福本和夫、講座派、そして李北満」『日本思想史研究会会報』第38号（2021）、71-89.
- 8 朝鮮総督府高等法院検事局思想部「内地裁判所に於て為された治安維持法違反事件予審終結決定」『思想彙報』第6号（1936）、177-192。（以下「予審終結書」）。
- 9 「李北満氏逝く」および須山計一「温い手の思い出」『朝鮮新聞』1959年3月1日、3。（以下『朝鮮新聞』）。
- 10 「同志李北満の経歴」『統一と平和』1959年3月21日、2。同紙は李北満が所属した、韓国民民主社会同盟の機関紙（以下『統一と平和』）。

- 11 金正明編『朝鮮独立運動Ⅳ - 共産主義運動篇 -』（原書房，1966），264には「李福萬『李北満、福田萬太郎……コト』」、予審終結書には「李北萬、山田萬太郎……事 李福萬」とある。『統一と平和』には、幼名が李福満で冠名が李炳宇とある。
- 12 藤田俊次は収監時、隣の房は李福満であり、李北満の名で『歴史科学』に執筆していたと書いている。藤田俊次「独房の会話」風早八十二編『獄中の昭和史』（青木書店，1986），60-62.
- 13 予審終結書に「労働階級創刊準備号ニ柳春樹名義ヲ以テ」とある。
- 14 林田朝人「李朝末期の経済状態に関する若干の考察」『歴史科学』第5巻第12号（白揚社，1936），73-97.
- 15 「朝鮮の文化界」『文化革命』1949年1月号（文化革命社，1949），59-66、および前掲『朝鮮新聞』。
- 16 前掲『統一と平和』1958年6月1日，2.
- 17 前掲『近代日本社会運動史人物大事典』，930. この他にも『岩波 世界人名大辞典 第1分冊』，223、広瀬貞三「李清源の政治活動と朝鮮史研究」『新潟国際情報大学情報文化学部紀要』7（2004），37や井上学『日本反帝同盟史研究』（不二出版，2008），227がある。
- 18 前掲「<朝鮮>から見た中野重治」，124、他には金三奎『朝鮮と日本のあいだ』（朝日新聞社，1980），106や、林浩治「日本プロレタリアートは連帯していたか」『新日本文学』9月号（2001），97がある。
- 19 朝鮮総督府高等法院検事局思想部「最近東都に於て発覚した合法を擬装する朝鮮人の共産主義運動」『思想彙報』第10号（1937），174-186.（以下「東都の共産運動」）。その他『特高月報』昭和8年3月分（1933），5には「年齢26」、『特高月報』昭和11年9月分（1936），133には「李福万29歳」とある。
- 20 前掲 藤田俊次「独房の会話」，61.
- 21 前掲「予審終結書」。
- 22 「訃告」および「李北満氏厳親別世」『独立新報』1946年5月14日，2.
- 23 「無産者社李北満被検」『朝鮮日報』1931年1月25日，2 に「李北満と実弟李寿満を連行」とある。
- 24 1932年12月15日付「出版法違反及其他検挙ニ関スル件」。
- 25 同上。
- 26 朝野温知「わたしの履歴書 1」『部落』第19巻5号（部落問題研究出版部，1967），13.
- 27 『毎日申報』1924年6月29日，3.
- 28 前掲「わたしの履歴書 1」，13・16. 1925年12月に「東京に出て他の会社に就職していた李福万君」とも書いている。
- 29 松本健二『戦後日本革命の内幕』（亜紀書房，1973），15. なお会った年は、具体的には記されていない。
- 30 前掲「日本プロレタリアートは連帯していたか」，97.
- 31 前掲『朝鮮と日本のあいだ』，106.
- 32 作品一覧表については、朝鮮語の部分日本語に翻訳した上で以下の項目を示した。
① No…掲載誌（紙）の発行順に付した通番、②作品名、③筆者名…1924・25年の作品で、掲載紙上の筆名、④掲載雑誌・新聞…連載の場合は初回と最終回の号。ただし現物が確認できない作品もある。
- 33 福本和夫は1926年の『方向転換』・『理論闘争』上で、プロレタリア運動は組合闘争から政治闘争へと転換し、理論闘争して分離した後に再結合する「分離結合論」および革命的前衛党の結成を主張した。それまでの山川均の経済・政治・労働との大衆的闘争による協同戦線党結成論を、折衷的・日和見と批判した。
- 34 略称をKAPFと称したのは1930年以降のようである。ここでは便宜上使用する。
- 35 「朝鮮プロ芸術同盟」『東亞日報』1926年12月27日，2.
- 36 星野達雄『金斗鎔と星野きみ』（1992），19.

- 37 「第三戦線社創立」『朝鮮日報』1927年4月3日, 1.
- 38 「第三戦線社巡回講演」『中外日報』1927年6月13日, 2. 同様の記事が『東亜日報』・『朝鮮日報』にもある。また『中外日報』1927年6月26日, 3には28日開催分の演題として、洪曉民「方向転換に立脚した文芸理論」・高景欽「文芸の社会性」などとある。
- 39 「朝鮮の芸術運動」『プロレタリア芸術』第1巻第3号（日本プロレタリア芸術連盟, 1927）, 47-48.
- 40 青野季吉「自然生長と目的意識」『文芸戦線』第3巻第9号（文芸戦線社, 1925）, 3-5 など。
- 41 李北満「当然に揚棄する所謂『目的意識性』」『朝鮮日報』1927年12月12日, 3.
- 42 村田陽一編「日本についてのテーゼ」『資料集・コミンテルンと日本』第1巻（大月書店, 1986）, 264-276.
- 43 満田郁夫「事実としての『雨の降る品川駅』」『梨の花通信』第40号（2001）, 604.
- 44 韓雪野「文芸運動の実践的根拠」『資料世界プロレタリア文学運動』第3巻（三一書房, 1975）, 591.
- 45 江口渙・金斗鎔「朝鮮プロレタリア文学運動の史的展望」『民主朝鮮』9月号（民主朝鮮社, 1949）, 41.
- 46 無産者社は、当局の記録等では高景欽が朝鮮共産党再建を目途として設立したと記されている。筆者は『無産者』創刊号を3月に発行する予定であったこと、金三奎が「文学団体である無産者社」（前掲『朝鮮と日本のあいだ』, 24）と言っていること等から、途中で路線変更したと考える。別項で検討する。
- 47 『無産者』第3巻第1号（無産者社, 1929）。「『芸術運動』の改名!」であることから、第3巻第1号としている。
- 48 水野直樹「『雨の降る品川駅』の事実しらべ」『季刊三千里』21号（三千里社, 1980）, 97-105.
- 49 前掲『日本反帝同盟史研究』, 227.
- 50 同上, 437-438.
- 51 前掲『朝鮮独立運動IV』, 947.
- 52 槇本楠郎『赤い旗』（紅玉堂書店, 1930）, 105.
- 53 1930年10月27日の葉書「李へ」には李北満の健在を喜び、「林和くん・金トヨ君〔金斗鎔：池山〕にもよろしく」とある。この李は、李北満とみて間違いない。「李へ」および「槇本楠郎へ」『中野重治全集第27巻』（筑摩書房, 1989）, 462-463 および「解題」, 688.
- 54 「プロ科学主催 国際問題講習会」『戦旗』第3巻第7号（戦旗社, 1930）, 巻末.
- 55 『新興教育』第1巻第2号（1930）, 86. 「植民地研究会」はほとんど活動実績がない上に、廃止と設置を繰り返していた。
- 56 前掲「『無産者社』李北満被検」。
- 57 「李北満事件拡大?」『朝鮮日報』1931年2月6日, 2.
- 58 「李北満ら無産者社の同志たちと再会でき、うれしかったです」。前掲『朝鮮と日本のあいだ』, 26.
- 59 『思想月報』18号（1935）, 91.
- 60 同上, 306より抽出。
- 61 前掲「予審終結書」。
- 62 前掲「東都の共産運動」。
- 63 本稿で参照している1959年の『朝鮮新聞』とは異なる。
- 64 前掲「東都の共産運動」。
- 65 警保局保安課「既往六ヶ年ニ於ケル在住朝鮮人ノ治維法違反事件検挙調」、『最近ニ於ケル在支不逞朝鮮人ノ策動ニ関する件』（1942）。
- 66 『思想月報』第43号（1937）, 331-335.
- 67 前掲『朝鮮新聞』。
- 68 服部之総とは東大新人会で出会ったと思われ、終生交流があった。

- 69 姜晋哲「社会経済史学の導入と展開」『国史館論叢第2輯』（1989），10.
- 70 前掲『朝鮮新聞』。
- 71 前掲「東都の共産運動」。

Abstract

The life and writings of proletarian activist Lee Bukman

-Focusing on portraits and activities up to 1945-

Kazuo IKEYAMA

Lee Bukman is a writer who has been active in proletarian literature and anti-colonial movements in Japan and the Korean Peninsula. Shigeharu Nakano is the person who appears in the opening “Lee, goodbye” at “Shinagawa Station where it rains”. Before the World War II, he mainly accused the colonial Korean literary movement and the actual situation of labor and education, insisted on liberation from imperialist rule and national independence, and participated in the Korean Communist Party reconstruction movement. After the war, he worked as a businessman to establish an independence and national unity nation on the Korean Peninsula. Throughout his life, he has written more than 70 works, mainly contributing to magazines and newspapers.

Although Lee Bukman occasionally appears as a member of a treatise or organization, he rarely leads an organization or activity, and there are many vague parts about his character.

The author examined Lee Bukman’s life, thoughts, and works, which had not always been taken up so far, and in the prewar period, a national movement centered on proletarian art activities between Japan and Korea and Korea activities of the Korean Communist Party. And socialist activities as much as possible. A detailed examination of Lee Bukman’s actions and works not only gives a glimpse of the social movements of prewar Koreans in Japan and their relationships with Japanese activists, but also a colony that does not appear in the records of the ruling side. It is possible to know the actual situation of domination, and I think that the situation at that time can be understood more clearly than before.

Furthermore, verifying the left-wing art movement and colonial education, which were the main activities of Lee Bukman, by commentary from the standpoint of Koreans in Japan, while understanding the interpretation unique to Koreans, as well as Japan, which has been common until now. I think it is

important not only from the perspective of the side, but also to know what kind of interrelationship the Korean activists in Japan and the surrounding Korean activists have brought to the Japanese activists.

As part of this article, I will summarize his personality, career, and prewar trends in chronological order, and know the trends in writing. Although verifying a work in relation to the background of the times and the status of activities is an important factor in understanding the human image, this paper only lists the works and describes simple trends, and is specific to the group of works. Verification will be considered in a separate article. Since the research so far is scarce and there are still vague points, it is useful for future researchers to eliminate the inconsistency of information as much as possible, to establish the image of the person and to clarify the achievements. It will be possible to present a positive direction.